HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	古代の商に関する一考察 ： エジプト文明と交易
著者	黒田，重雄
引用	北海学園大学学園論集，136：105-116
発行日	2008-06-00

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

古代の商に関する一考察

―― エジプト文明と交易 ――

黒　田　重　雄

目　次

はじめに（商と王家と文明）
1．エジプトの古代の商を考える
2．エジプト文明
　2-1．文明の発祥地 ―― クレタ島 ――
　2-2．エジプト文明とメソポタミヤ文明
3．王朝時代の交易
4．プントとの交易の意味するもの
　4-1．プントはどこか
　4-2．プントに関する一考察
おわりに

はじめに（商と王家と文明）

人類の祖先と言われるアフリカでは，当然のこととして，数万年前から人々や部族間でモノの贈与・交換が行われていたし，やがて，交換の仲介を専門とする「商人」，また，交換を行う場としての「市場」も世界に先駆けて生まれていたことは想像に難くない。

こうして，「商」（交換や取引）はアフリカに生成発展したことから，古代の商の歴史を研究する場合，まず，アフリカのそれを念頭に置くことが必然となる。その場合，アフリカでもいち早く文化的に繁栄した（エジプト文明）古代エジプトにおける「商の発達」と「その歴史的背景」研究は欠かせないであろう。

では，エジプトでは，どのように商が始まり，発展していったのであろうか。また，商の部分を占める交易が，文明の発生と発展にどのように関わっていったのであろうか。また，その交易にエジプトのファラオ（王家）はどのように関わっていたのであろうか。筆者にとっての，そうした素朴な疑問に対して，少しでも解決の糸口をつかみたいという意図をもって書いたものが本

小論である。

エジプトには，歴史の黎明期以前の早い時期から交易のためにメソポタミヤや地中海沿岸からの商人たちが往来していたことは分かっている。もともと，エジプトは，ナイル河畔で綿花を中心とする農業生産地帯であった。穀物と金など若干の鉱物が交易におけるモノの中心であった。

それでも，歴史の黎明期に入ってからは，交易は一段と活発化したし，ルクソールの葬祭殿を建立したハトシェプスト女王を始め幾人かの王たちも積極的に交易を行っていた。もちろん，トトメス3世などによる遠征によって多くの戦利品も入ってきている。

とにかく，交易によって，非常に多くの財宝がもたらされている。その中心的役割は商人であったが，エジプトの場合，王による交易の推進を見逃すことはできない。

小論では，また，エジプト文明には（外国との）「交易」が大きく与っていたことを示してみたいのである。

1．エジプトの古代の商を考える

ナイル川流域の緑地帯（日本の約4倍の面積）に人が住み始めたのは，紀元前3万年ごろで，定住は紀元前1万年頃だといわれている。また，前5000年頃に農耕が始まり，前2700年頃には統一王朝が成立している。

紀元前5世紀の古代ギリシアの歴史家ヘロドトスは次のように言っている[1]。「たとえ予備知識を持たずとも一見すれば明らかなことであるが，今日ギリシャ人が通航しているエジプトの地域は，いわば（ナイル）河の賜物ともいうべきもので，エジプト人にとっては新しく獲得した土地なのである。」

ナイル川が毎年もたらす肥沃な土壌と水がエジプトの豊かな農業を可能にした。毎年ナイル川の洪水で上流から栄養分をたっぷり含んだ土が流れてきて，地力が維持できるようになっていて，あとは洪水が引いていく時に水の管理さえすればよかったのである[2]。

一方，古代エジプト文明を形成したといわれるエジプト王朝はおよそ紀元前3000年前後に成立しているが，文明的にはメソポタミア文明の影響を強く受けているという説がある[3]。つまり，ピラミッドはメソポタミアの「ジグラッド」に類似しており，紀元前3000年ごろにはメソポタミアからワインやビールが伝えられているからである。

カーティンによると[4]，エジプトと東地中海における古代交易は，「およそ紀元前7000年，人々は地中海を船で移動し始めた。都市文明が誕生して文字で何かが記録されるようになる，はるか以前のことである。記録文書がなくても具体的な遺物に彼らの交易していた耐久品が豊富に残っている。しかし，交易に従事していたに違いない商人については，その存在さえほとんど分からない。……。紀元前3600年前から3000年の間に，メソポタミアに現れたのと同様の農業技術と都市生活がエジプトに現れ，特異かつ特徴的なナイル渓谷文化がかたちをなし始めた。交易は同時期に始まったに違いない。なぜなら，王朝成立以前の（約紀元前3100年以前の）品々が今日の

レバノンのビュブロスから発見されているからである。」

エジプトへは，古くからメソポタミヤ，クレタ，さらに下って，ギリシャ，ローマが地中海を通って入ってきている。

2．エジプト文明

2-1．文明の発祥地 ── クレタ島 ──

文明と言えば，世界四大文明が有名である（S.ハンチントンによる7つ，ないし8つの文明説もある）。世界四大文明とは人類の文明史の歴史観のひとつ。歴史上，4つの大文明が最初に起こり，以降の文明はこの流れをくむとする仮説であるが，四大河文明とも言う[5]。ここで四大文明は，メソポタミア文明・エジプト文明・インダス文明・黄河文明を指す。

ところで，最初の文明の発祥となると，例えば，後にギリシャ文明に影響を与えたといわれるエーゲ海文明（クレタ文明）という説も有力である[6]。紀元前3000年前後に東地中海における海上交易が増加し始めた。大量の黒曜石が，その原産地からかなり離れた所で，考古学的発掘によって発見されている。それからの1千年間に，エーゲ海文化がかたちを成しはじめ，紀元前2000年ごろに少なくとも都市の原形となる社会構造が現れた。つまり，エーゲ海文化の主要な遺跡は，エジプトやメソポタミア型の都市ではなく，クレタ島のクノッソスのような宮殿か，ギリシア本土のミケーネや小アジアのトロイのような城塞である。エーゲ海の端で生じたこのような変化と人口増加は，「地中海」型食糧作物―主として小麦，オリーブ，ブドウの組み合わせ―の登場に基づいていた。このような作物は，エジプトやメソポタミアで生産性の高い作物ではなかった。また，ギリシア語の初期のかたちとされるミノア文字など後のギリシア文明に連なる先行文化が現れるとともに，青銅技術も現れている。

2-2．エジプト文明とメソポタミヤ文明

小副川幸孝氏によると，「旧約聖書の舞台となっている世界は，東はペルシャ湾にそそぐチグリス・ユーフラテスの二つの大河に挟まれたメソポタミア（川に挟まれた地帯という意味）と呼ばれる地域と，西はエジプト，北はチグリス・ユーフラテス川の上流域，南はアラビア半島の砂漠地帯にいたる広大な中近東と呼ばれる地域である[7]。」

この地域は，古代社会においては，メソポタミア文明とエジプト文明と呼ばれる二つの大きな文明社会が築かれた地域であり，旧約聖書の舞台は，いわば，この二つの文明の世界でもある。

歴史家アッリアノスによると，紀元前4世紀には，マケドニアのアレクサンドロス大王の遠征時，エジプトも制圧しているが，それは下エジプトだけである。そのとき名付けられた港「アレキサンドリア」は，その後，一大貿易港となっている。しかし，ルクソールあたりの上エジプトには及んでいない[8]。

エジプトが遠征したこともある。トトメス3世（在位前1479－25頃）時代には，17回のアジア

に遠征，フェニキアの港を制圧して海路で遠征，シリア・パレスティナを植民地としたとある。

こうした歴史の中に，全体的に下エジプトはあまり登場してこない。侵略もなく手付かずの状態の地域で，後段で検討されるごとく「交易」を活発に行いながら，じっくり文明を築くことができたということかもしれない。

3．王朝時代の交易

エジプトは一目してナイル河と生死をともにしている。したがって，早い時期からパピルスの葦舟以外に帆とオールを持つ木造船が明瞭に登場していたことは，当然といえば当然である[8]。

古代エジプトの海上交易に関わりのありそうな史実を，**参考文献(9)**によって年表風にたどってみよう(抜粋している)。ここで，古代エジプト史の時代区分のもとになっているのは，プトレマイオス朝時代（紀元前3世紀）の神官マネトーの記したと言われる区分である。

先王朝時代：(前3000－2650頃)前4500年頃，四角い帆とオールを持ち，船首と船尾が高くせり上がった木造船があった。

古王国時代：(前2650－2180頃)

第4王朝：スネフェル王（在位前2575－2551頃），レバノンから40隻分の杉材を輸入。

クフ王（在位前2551－2528頃）の大ピラミッドの舟抗に入れられていたクフ王の船は，レバノン杉で作られているという。

第5，6王朝：シナイ半島，西アジアや**プント**へ，数次の遠征。ペピ2世（在位前2246－2152頃）治世，**プント**遠征のため紅海で船を建造中，官僚が遊牧民に襲われる。

中王国時代：(前2040－1785頃)

第11,12王朝：前2000頃，メンチュヘテプ2世(在位前2010－1998頃)，同3世(在位前1998－1991頃）の治世，**プント**に交易遠征隊を派遣。アメンエムハト3世（在位前1844－1797頃）治世，エジプトの交易範囲がアナトリア，バビロニアまで広がる。

前1400年頃まで，フェニキアを勢力下におく。ナイル河の支流と紅海との間に，運河が掘削される。

新王国時代：(前1565－1070頃)

第18王朝：前1490年頃，トトメス3世の摂政ハトシェプスト女王（在位前1473－58頃）は，**プント**へ遠征交易隊を派遣，クレタ島との交易を再開。前1468年頃以降，トトメス3世(在位前1479－25頃)は17回のアジアに遠征，フェニキアの港を制圧して海路で遠征，シリア・パレスティナを植民地とする。

末期王朝（前750－305頃）

第27王朝：前521年　ダレイオス1世（在位前522－486頃），紅海を結ぶ運河を完成させる。

プトレマイオス朝（前304－前30頃）

前 331 年，アレクサンドロス在位(前 336－323)，アレクサンドリアを建設，その後，世界最大の交易港になる

さらに**参考文献**(9)によると，古王国時代から中王国時代にかけ，ナイル河の上流部のヌビアや陸づたいで行けるオリエントにしばしば遠征し，また交易しているが，それ以外ではプントへの遠征や交易が特別視されている。それら遠征は交易を維持することにあり，軍事遠征ではなかったとされる。前 1730 年頃における異民族ヒクソスの侵入は，エジプトを大転換させる。異民族を駆逐した新王国時代，エジプトはオリエントの国々と覇権を争い合う好戦国家となり，最大級に広大な地域を占めるようになる。そのなかでオリエントの国々との交易が拡大し，エジプトにも商業が生まれたとされるようになる。しかし，エジプトの国力は疲弊しはじめる。他方，商業を掌握した神官団の富裕化が進み，政治社会に混乱が起き，異民族の支配を受ける地域となっていく。なお，プトレマイオス朝時代，アレクサンドリアは世界最大の交易港になるが，エジプトは相変わらず単なる農業国にとどまり，交易国となることはなかった。アレクサンドリアが世界最大となったのは，主としてアジア・地中海交易の中継地としての拡大であった。

こうして，古代エジプトの優に 3000 年にも及ぶ歴史のなかで，様々な遠征や交易が行われ，それによって様々な略奪品や貢納品，贈答品，交易品が移出入されたことであろう。

P.D. カーティンによると，エジプトにおける交易は外国の商人によってなされていたらしい[10]。「ナイル渓谷における村落レベル以上の交易は，初期王朝時代から国家によって管理されていたようであるが，はっきりとはしていない。エジプトの記録には紀元前 2000 年以前の商人については何も書かれていないが，歴史家は王家の穀倉とそれを取り仕切っていた官僚の存在とを関連づけて，何らかの大規模な交易がおこなわれていたと考えている。エジプトと東地中海地域の他の場所との交易は，普段は政府の厳しい管理下にあったが，外国人商人の手によってもおこなわれていた。古代地中海史の専門家は，古代メソポタミアやずっと後のアフリカのように，ここで最も活動的な初期の交易民は多様な機能をもった都市文明の中心地域の人々ではなく，何かを売って「文明」産物を求めることに特化した社会出身の人々だとしている。つまり，ナイルデルタの海洋交易の初期段階では，レバノン人がエジプトに木材を持ち込み，エジプト工芸品を持ち帰ったのであって，エジプト人が木材を求めて国外へ出ていったのではない。」

その頃，活発に地中海商業を司ったと考えられる民族に，まず，クレタ人がいる。紀元前 12 世紀には，フェニキア人が取って代わっている。

黒田（美）（1995）は，商人の街「アレッポ」について書いている[11]。「アレッポは，最古の都市の一つに数え上げられているが，地勢学的にみて，一大商業中心地にふさわしい条件を満たしていた。地中海への距離は約 80 キロ，東のユーフラテス川にも同じ距離にあった。中心部には要塞堅固な城壁をもって治安に備え，周辺に農地，果樹園を擁し，その上歴史的にも特殊な産物を開発し続けていた。近隣地方のみならず，中東の全域，遠くはヨーロッパ，インド，中国にまで

物産を提供すると同時に，これらの地域から運ばれてくる特産品の，中継地としての役割を演じ続けてきた。……。有名な絹の道を通って運ばれた初期の交易品として，東からは，絹の他に鉄，真鍮，象牙，香水，貴石，その他の奢侈品が，西からは，ガラス，ブロンズ，パピルス等が挙げられている。そして，既に紀元前115年には，パルティア（中央アジアから南下した遊牧民が紀元前284年に設立した帝国）の王と韓王朝の間で，商人や旅人が，安全かつ容易に往来できるよう保証した協定が結ばれていたことが知られている。」

一方，紀元前1世紀～紀元後3世紀にかけて最も商業の栄えたといわれるパルミラからは隊商で入ってきたことを窺わせている(12)。

「パルミラは，現在のシリアに位置する古代の隊商都市である。ローマ帝国の時代に最盛期をむかえた。……。シルクロードに位置するパルミラは，東西の交易を結ぶ重要な場所として，紀元前1世紀～紀元後3世紀にかけて最も栄えた。都市の中で裕福であり，権力を握っていたのは，商人であった。こうした商人たちは，自分の家族のために立派な墓をつくることができた。」

これに対し，紅海を南方へ下っての交易は，少々様子が違っている。

再び前出のP.D.カーティンによると，「ナイル川を遡上し紅海に出て，おそらくイエメンとそのアフリカ側対岸を指す伝説のプントの地に至るエジプト南方への交易は，政府の遠征によっておこなわれていた。このような官営の遠征は，紀元前2500年前に始まったが，主に乳香や黒檀，没薬，金のようなエキゾチックなものを扱っていた。個々の遠征はこれらの産物を，時代と場所を考慮すれば大量といえるほどエジプトに持ち帰ったが，交易としては継続的なものではなかった。宮廷がその気になるまで遠征が数世紀にわたって一度もおこなわれなかったこともあったようだ。」(13)

先に見たごとく，各王朝も，**プント**へは数次にわたって交易船を向かわせている。特に，ハトシェプスト女王（在位前1473－58頃）は，**プント**へ遠征交易隊を派遣しているばかりか，クレタ島との交易も再開させている(14)。ハトシェプスト女王は，紀元前1400年代（前15世紀）に伝説の**プント**と交易を行って莫大な利益を得たとある(15)。

4．プントとの交易の意味するもの

4－1．プントはどこか

参考文献(9)によると，以下のようになる。

前1450年頃，トトメス3世の治世，エジプトは最大版図となり，北はフェニキアを超え，ユーフラテス河から，南はナイル河の第4急湍まで広がった。そのうち，エジプトは，ヌビア，リビア，シナイ半島，シリア，パレスティナ，そしてアナトリア，クレタ島などが，交易範囲であったとみられる。それらのうち，海上交易地はプント，シリア，パレスティナ，アナトリアの一部，クレタ島とみられる。……。その遠征が長い歴史のなかで特記され，かつ何次にもわたり，そして海上経由にならざるをえなかったプントの位置が，何とも心許ないことに，不明なのである。

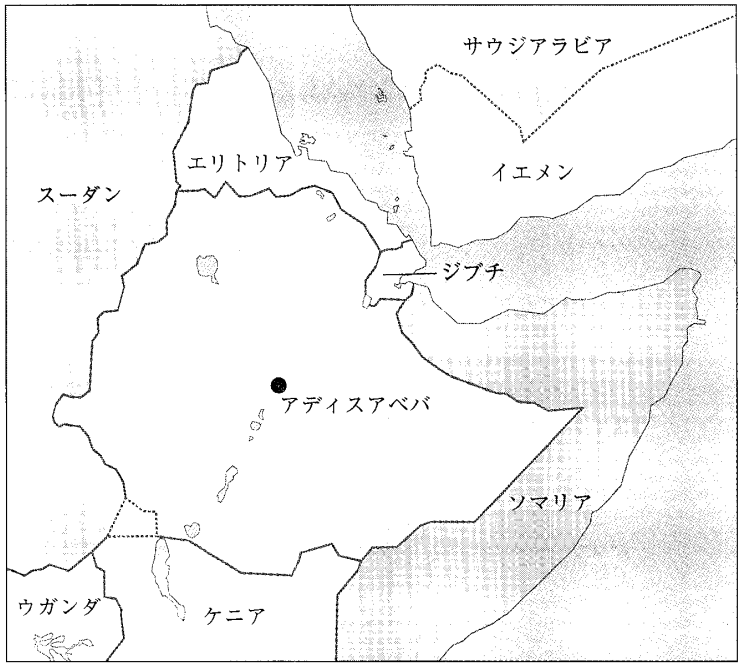
……。最近の研究では，‘スーダン南部から［北エチオピアの］エリトリア北部付近の紅海沿岸地域’とか，‘エチオピアの奥地までを含む広い地域と考えられている’のようである。」

さらに続けて，次のような記述もある。「前14世紀半ばのアマルナ文書は，オリエント諸国との外交書簡である。そこに記載されている財貨は，ファラオと諸国の支配者とのあいだで，兄弟の友好のあかしとして交換された［贈答品］であって，通常の交易品ではなかった。それでも，贈答品は値踏みにされたらしく，クレンゲル氏は‘もしや量や質が期待通りでないときは，送り手に苦情をいった。……この『贈り物』の輸送を請け負ったのは使者あるいはまた商人である。……［かれらは］はっきりと区別できなかったという。’……。その交換品は，メートランド・A・エディーによれば，次の通りであった。‘数個の金製と銀製のつぼ，エジプト亜麻布10束，パピルス500巻，上等な王族用の亜麻の衣類10着，そして牛皮500枚，綱500本，ヒラマメ20袋，魚5かご’。ここで強調すべきことは，エジプトの輸入品の交換あるいは支払手段としての輸出品は金，銀ばかりでなく，農産品が重要な地位を占めていたことである。」

4-2．プントに関する一考察

一方，上エジプトであるルクソールを中心とする地域は，どうであったか。解決の一つの糸口は，現在のソマリアやジプチあたりに，古くからメソポタミヤが進出ないし侵略していたというものである【図1】。

これについては，メソポタミヤが，アラビア半島の南方の砂漠を通って隊商として入ってきたか，アラビア海から通って直接上陸したのではないかと考えることができる。



【図1】 日本国外務省の「ソマリア」図より作成

これまで，エジプトの交易では，地中海を通って例えば，クレタ文明，ローマ，ギリシャ，パルミラなど（もちろん，メソポタミヤも含むであろうが）との地中海ルートの繋がりが指摘されている。

これに対し，第5・6王朝，第11・12王朝，第18王朝（ハトシェプスト女王）は，プントとの交易を行っている。ハトシェプスト女王の時代に交易による大きな富の蓄積など経済の活性化が言われいる。そのときの港は，ルクソールからおよそ真東に当たるコセイルという港であり，そこから船で紅海を下って，プント（ジプチや北ソマリアにあったらしい国家）と交易を行っていたことになっている。

古代のエジプト王国では，中王国時代までは南のヌビアあたりまでしか認識していなかったようであるが[16]，新王国時代になると，海外遠征や国土拡張もあって，周囲の外国・異民族に対する言及が文書にたくさん出てくるようになる[17]。

ではなぜ紅海を下ってプントと交易を図っていたのか。これは歴史家にとっては，一つの謎であるらしい[18]。確かにいえることは，そこには各種の交易品が大量に存在していたということである。

では，なぜプントにはそれだけの物が集まっていたのか。アフリカの産物ではなかったようなのだ。するとそこに，メソポタミヤとの関係が浮かび上がってくる。

メソポタミヤの人々が何らかの形（移住したか，侵略であったか）で上陸して一つの集落を形成していたことはありうる。とすると，カーティンのいう「文化の異なる人々は，どのようにして交易をはじめたのか？　そこには常に特殊な仲介集団「トレード・ディアスポラ（trade diaspora）」（交易離散共同体）がいた！」のではないか（【図2】中の赤丸印が，トレード・ディアスポラであったかもしれない）[19]。

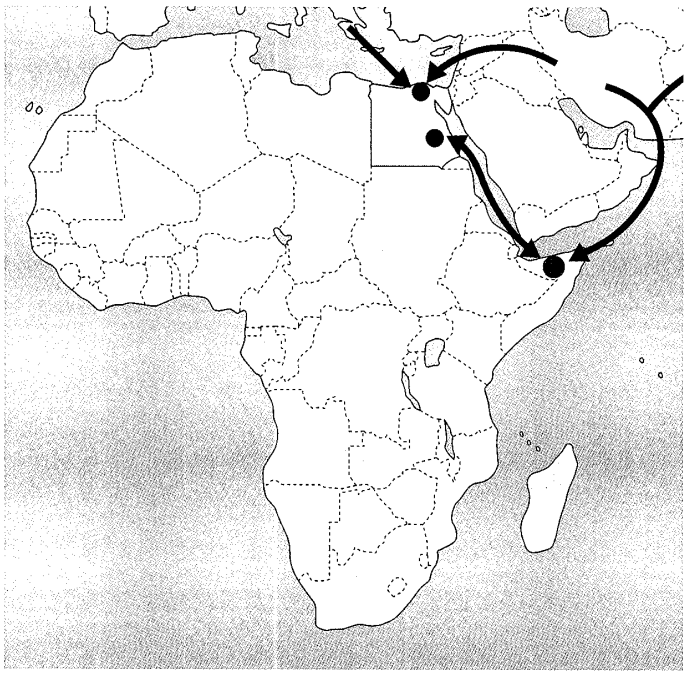
彼らは，海を通ってか，アラビア砂漠を隊商でか物資を運んできていたことになる。メソポタミヤの物資を潤沢に蓄え，交易を行っていたのかもしれない。

一方，当時から，エジプトは麦，綿，金の産地として有名であり，そうしたものとプントとの交易は盛んに行われていたことは想像するに難くない。ハトシェプスト女王の時代（前15世紀）に突然ということでもないだろう。歴史書によると，それより数世紀遡る王も交易を行っていたことを語っている。

メソポタミヤがいつごろアフリカ東部に上陸したのかも問題である。また，前数千年前から文明と言われる地域・国（メソポタミヤ，エジプト，ヒンズー（インド））同士の交流があったことを窺がわせるものがある。

ただし，中国では，比較的独自に文明を築いていたという説がある。しかしながら，中国の場合でも，黄河文明と揚子江文明との交流があったであろう。

こうしたことから，文化とか文明とかは何かを考えさせられるのである。



【図２】 古代エジプトの交易ルートに対する筆者の推測（赤丸印：メソポタミヤ進出地域）

おわりに

2008年3月下旬，ツアーに参加し，数日間エジプトを旅してきた。理由はいろいろあるが，日頃，古の交易や商について研究していることもあり，商の原点ともいえる地域に身をおいて考えてみたかったのである。

2007年6月，エジプト考古学庁のザヒ・ハワースは，1903年にハワード・カーターらにより「王家の谷のKV60」と呼ばれる小さな墓で発見された身元不明のミイラをハトシェプスト女王と断定した[20]。今回の旅で，ルクソールにある女王が作らせたとする壮大な葬祭殿を見ることが出来たし，ミイラの方は，エジプト考古学博物館で実物を目の当たりにすることができた。

実際に，巨大なアブシンベル神殿やピラミッドを見て回っていると，王家の威光とエジプト文明の壮大さを身を持って体得できたと感じる。しかし，その一方で，ナイル川流域以外は遥かに広がる砂漠一色であり，世界的な文明が現れたことが不思議に思えてならない。

ツアーの間，エジプト公認ガイドがつきっきりで説明をしてくれていたし，セミナーでエジプト考古学庁上級役人からルクソールのカルナック神殿前の発掘の新発見の話も聞くことができた。

その講話の直後，神殿前の道路を整備するに当たって立ち退きを言われた住民の反対デモにも遭遇した。市長に退陣を求めるデモの形をとっているということであった。ガイドの説明では，エジプトではこのようなデモは珍しいということであった。現在のエジプトは軍事政権であり，表向きはともかく，基本的に反対や批判は許されないということらしい。大統領から市長まで軍

政一色である。そのため，市長に反旗を翻すのは珍しいらしいのだという。今回のデモには，子供や女性の参加者が多いようであったが，住民の中の長老（住民の意見をリードしている）が反対してることに起因しているようだとの話を聞く。

とにかく，遺跡や文化財の保護・その観光活性化のあり方と地域住民の生活との関係について考えさせる事態に，はからずもルクソールという地球上の最高峰に位置する遺跡の地で遭遇したのである。

小論では，ハトシェプスト女王の注目し，その交易のあとづけを行ってみた。女王は地中海でなく紅海を下って，プントと交易したことになっている。

この場合，なぜプントが交易の適地だったのか。そこには既に大きな市場（卸売市場）が形成されていたのではないか。商人集団が出来ていたのではないか（ディアスポラ―注⒆参照―）。

そこには，メソポタミヤからの侵入があり，物資が大量に持ち込まれていたという説もあり，それを女王は知っていたのかもしれない。

いずれにしても，そこではアフリカの産物はなかったらしい。エジプト文明は，クレタ人，アッシリア人の商人などの交易によって，また，メソポタミヤ，インダス，中国あたりの産品を商人によってと，遠征による戦利品もあったかも知れないが，王の交易による部分が大きいことを窺がわせるのである。

ともあれ，エジプト文明は，他の文明同様，(近年言われているように)独自に発達したものでないことは分かったような気がした。エジプトとメソポタミヤとの関係についても得るものがあった。

例えば，ツタンカーメン王の埋葬品は膨大だが，金の産地であったことから金細工はエジプトのものかもしれないが，それ以外については交易品がかなりあった可能性が高いといえるのではないか。

特に，この旅で最も考えさせられたのは，国や地域を活性化させるためには交易や商が欠かせないものであるということである。

エジプトについては，長い間ナイル氾濫と付き合った麦や綿など農業だけに頼っていては文明といわれる状態を作れなかったであろう。絶大な権力者(なぜなれたのか)といえども，ルクソールにある神殿や葬祭殿などを建造するため，膨大な人を使ってアスワンから巨石を切り出し，ナイルを使って運び出し，また膨大な人を使って大建築物をこしらえるなどの費用を賄えきれなかったのではないか。とにかく戦利品や税金だけでは賄いきれなかったであろう。どうしても商や交易による利益が，それも莫大ともいえる利益が欠かせなかったはずである。

塩野七生の書にも，ローマ帝国の軍事力とともに流通による経済力の重要性が強調されている[21]。ローマ帝国も地域を拡大しながら，作られた道路を用いて交易や流通を活発化させ，道路上に出没する強盗には厳罰を持って処したとある。また，フェニキア人によって建国されたとさ

れるカルタゴの経済力は相当なものだったらしいが，それで平和主義をとっていられなかった。ローマがポエニ戦役で勝ち取ったからである。帝国は道路を作りそれを流通ルートにして交易の活性化を図っている。ローマも戦利品だけでなく交易には力を注いでいたということである。

日本では，織田信長の「楽市楽座」がよい例である[22]。織田氏が支配していた尾張は，当時の石高は50万石と全国1，2を争う肥沃な土地柄であったが，ほとんどは家臣の俸禄につかわれたのであった。そこで規制緩和と減税政策を一挙に行った。つまり，経済改革「楽市楽座」を行い，そこでの利得で傭兵を雇って，地域拡大を図っていったということである。

エジプト，ローマ，日本，いずれの国々も，商を活発化させることによる潤沢な富の蓄積と兵力の増大による地域拡大策を図っていったことを改めて思い知らされた思いである。

注と参考文献：

(1) ヘロドトス著（松原千秋訳）(1998)『歴史』(上)，岩波文庫，p.164。

(2) 金岡新「世界史講義録」：(http://www.geocities.jp/timeway/kougi-5.html)

(3) 小副川幸孝「2007年聖書月間・聖書の舞台を知ろう」：(http://www5a.biglobe.ne.jp/~fjelc/biblestudy/biblemonth/old1.html)

(4) Philip D. Curtin (1984), *Cross-Cultural Trade in World History*, Cambridge University Press.（フィリップ・カーティン著（田村愛理・中堂幸政・山影　進訳）(2002)『異文化間交易の世界史』，NTT出版，p.116)。

(5) フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia)』

(6) 旅研：(http://www.tabiken.com/history/doc/F/F188L100.HTM)

(7) 小副川幸孝，「同上サイト」。

(8) アッリアノス（大牟田章訳）(2007)『アレクサンドロス大王東征記』(上)，第2巻・第3巻，岩波文庫。

(9) 篠原陽一「エジプト ── 外国人商人に依存 ──（海上交易の世界と歴史)」：(http://www31.ocn.ne.jp/~ysino/koekisi1/page003.html)

(10) Philip D. Curtin (1984)（フィリップ・カーティン著 (2002)，『訳書』，pp.116-117)。

(11) 黒田美代子 (1995)『商人たちの共和国―世界最古のスーク・アレッポー』，藤原書店，pp.41-42。

(12) 「3Dでよみがえる砂漠都市の地下室 ── パルミラに残された，商人たちの墓 ──」『Newton(ニュートン)』，2007年10月号，pp.80-87。

(13) Philip D. Curtin (1984)（フィリップ・カーティン (2002)，『訳書』，p.118)。

(14) ハトシェプスト女王(Hatshepsut)は，古代エジプト第18王朝5代目のファラオ。在位は，紀元前1479年頃～紀元前1458年頃。父はトトメス1世，母はイアフメス。夫はトトメス2世，娘はネフゥルウラー。夫であるトトメス2世は妾腹の息子トトメス3世を次の王にせよと遺言したが幼かったため，以後22年間にわたり共治王を務めたが実際には在位中，彼女が絶対的権力を保有していた。その際には男装し，顎に付け髭をつけていたと伝えられる。ハトシェプストの意味は「最も高貴なる女性」である。(出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia)』)

(15) ヌビア(Nubia)は，エジプト南部アスワンあたりからスーダンにかけての地方。古代エジプト語のヌブ（金）から古代ギリシア・ローマ人がそう呼んだのが始まり。アラビア語ではヌーバ。ハム語族を主体とする。もともとエジプトとヌビアはそれぞれ独立した別の国であった。その大部分はナイル川流域で農耕を営むが，砂漠では遊牧も行われている。ヌビアは古代から，奴隷や黄金・牛の供給地

として，エジプトにとって重要な地域であった。6世紀にはキリスト教王国がたてられたが，7世紀中ごろからイスラム教徒の侵入を受け，14世紀にマムルーク朝に征服されてイスラム化した。現在でも，ヌビアの人々は，独特の文化やエキゾチックな風貌など，エジプトとは異なる独自性を残している。現在は北部の一部がエジプト領，残りはスーダン共和国領。ヌビア遺跡郡は1979年に世界文化遺産に登録された。

（出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』，「Yahoo Japan知恵袋」（http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q106345020））

(16) 南風博物館：（http://www005.upp.so-net.ne.jp/nanpu/history/egypt/maps/luxor.html）

(17) 無限∞空間：（http://www.moonover.jp/bekkan/bigin/egypt-forin.htm）

(18) 篠原陽一，「同上サイト」。

(19) Philip D. Curtin（1984）（フィリップ・カーティン（2002），『訳書』，pp.30-32）。

(20) ハトシェプスト女王の確定（出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』）

(21) 塩野七生（2006）『ローマ人への20の質問』，文春新書。

(22) （対談）堺屋太一・磯田道史・小和田哲男・本郷和人（2008）「織田信長・改革と破壊と」『文藝春秋』，2008年5月号，pp.260-279。